

聖なる頂から観測の中心へ

—19世紀を中心とする富士山の地図学的変遷—

ラドゥ・レカ（香港浸会大学）

訳 松島仁（静岡県富士山世界遺産センター）

山頂からのパノラマを目にするために山に登るという発想は、現在からみれば当然のことのようであるが、比較的新しい思考でもある。日本列島の最高峰である富士山の場合ほど、このことが如実に表れている場所はないだろう。日本の歴史において、富士山はほとんど遠望するものとされてきた。一方、聖地でもある富士山には巡礼者が絶えず登頂したが、巡礼者たちはその体験をほとんど記録に残さなかった。そして18世紀末以降、谷文晁などの一部の画家が芸術上の欲求から富士山に登頂し、「真の眺め」、すなわち「真景」⁽¹⁾を捉えるようになった。最も有名な例は池大雅の作品で、彼はその場で自身の体験を次のように書いている。「山頂の真の光景は、五尺四尺の紙に細部まで忠実に再現されており、距離も詳細に記されている。この絵は山頂で描かれ、浅間社で修正された」⁽²⁾。眼下に広がる雲海を含む登山に関する芸術的描写の最も顕著な例としては、1801年から1805年にかけて完成した小泉斐筆「富嶽全図巻」（栃木県立美術館蔵）があげられる。山頂を中心としたいまひとつの例外的な描写は、1808年に白雲が描いた「富嶽山頂図」（神戸市博物館像）である。以上のような例は明治時代にも継承された。たとえば富岡鉄斎は1875年に富士山に登り、1898年にその頂上を描いた大きな屏風絵「富士山図」（富岡鉄斎美術館）を制作している。

19世紀初頭、富士信仰の人気の高まりとともに、その表現方法も多様な展開をみせた。これらのなかには、地表から上昇して鳥瞰図視覚へと向かうものもあり、これは特に楡形恵齋や葛飾北斎らの錦絵に見られる一般的な傾向であった⁽³⁾。立体的な円錐形に組み立てられる富士山を描写した地図や版画も存在した⁽⁴⁾。俯瞰図へのこうした傾向は、1843年に秋山長年が作成した『富士見十三州輿地全図』⁽⁵⁾にも、地図という形で例示されている。同図は、富士山を遠方より眺める範囲で定義されているが、山頂そのものを中心としており、火口の真上を一直線に高所から見ているかのように描かれている。

その10年後、日本は劇的な変化の時代を迎えた。外国人観測者との交流が活発化していくなか、彼ら自身も富士山の象徴的な側面に興味を抱くようになった。1853年、マシュー・ペリーの遠征隊の隊員が下田湾から富士山を目にしたのは、その早い例である。隊員の一人は手書きの地図に富士山を描き込んでいたが、その正確な位置を推測する必要があった（図1）。1860年、初代駐日英国公使であるラザフォード・オールコックは、大規模な登山隊を率い富士山に登頂した最初の外国人である。オールコックにとって、登山は楽しい活動にとどまらな

かった。彼は専門家を同行させたうえ富士山の植生や鉱物を記録した⁽⁶⁾。彼は「口を開けた火口」を「ギザギザした縁のある大きな楕円形の開口部」と表現しているが、頂上からの眺めについてはほとんど触れていない。「我々が去った豊かな国は、はるか下に漂う雲の天蓋に完全に隠されていた⁽⁷⁾」。彼がロンドンの王立地理学会に送った報告書には、富士見地図をもとにした地図が添付されていた。最初の草稿は旅の途中で作成されたもので、「我々の行程は、この報告書に添付された現地の地図の大まかなトレースにほぼ正確に記されている。トレース用紙がなかったため、旅の途中で購入した日本の油紙製の外套（紙布引回合羽）に描いてもらったのだ」（口絵）⁽⁸⁾。こうした外套（カップ）の形と名前は、もともと16世紀後半に日本を訪れたヨーロッパ人が着用していたケープから着想を得たものであった。新たに日本を訪れた一連の西洋人のなかの最初の一人が、その旅程を示す地図を描くためにこのデザインを選んだことは意義深い。

1860年代には、他に4人の外国人外交官が富士山に登頂した。そのなかには、1867年に登頂した初の外国人女性、ファニー・パークス夫人も含まれている⁽⁹⁾。1870年代には、外国人登山者の大半は専門的な知識をもった者であった。冒険という要素に加え、彼らは山の科学的測定という別の目的にも焦点を置いていた。1873年と1879年にスタンフォード図書館の日本地図を編纂することになるエルヴィン・クニッピングは、開成学校の日本人学生の協力を得て、富士山のさまざまな地点で高度や気温、気圧を測定した⁽¹⁰⁾。翌年、地理学者ヨハネス・ユストゥス・ラインが富士山に登頂した。ラインは遠くから見た富士山の眺めから始め、それをドイツのアルコール入り伝統菓子である「巨大なシュガーローフ」に例え記述している⁽¹¹⁾。ラインは山頂から気圧や温湿度、火山円錐の直径と深さを測定し、巡礼者たちが水を汲んでいた金明水と銀明水について記述した。また、山や川、湖、人々の住居が見える角度についても測量した。これは数十年前に富士山の山頂角度を用いて海岸からの距離を測った伊能忠敬の手法を覆すものであった。

ラインによる観察は、富士山が遠くから望むランドマークとしてではなく、観察の中心として富士山頂に取って代わられた初めての事例と言えるだろう。ラインは、山頂から望む鳥瞰図（ドイツ語でVogelperspective）の直径を約52キロメートルと推定し、「このような崇高な地点から、新しい、しかし奇妙な世界へと視線を自由に移動させる機会が与えられると、喜びは大きく増す⁽¹²⁾」と魅了されている。その日記のなかで、彼はこれが今まで見た中で最高の景色だったと二度も述べている。そして眼下に広がる雲海を「グロテスクな形をしており、氷原と雪原のある極地の風景を描いた絵や描写を鮮やかに彷彿とさせる」と描写している。ラインは風景を地形として認識するだけでなく、これまで絵姿としてしか見ることができなかった、はるかに離れた場所のビジョンを自らに抱くことを許したのである。さらに、何世紀にもわたり富士山は遠望した山として美的に描写されてきたが、ラインは山頂自体から絵のようなイメージを提示して

いる。「芦ノ湖が部分的に見えた。夕焼けに紫色に輝く滑らかな氷面のようで、巨大な雪の塊に囲まれていた。しばらくすると、富士山はこの雄大な景色の上に東に長く尖った円錐状の影を落とし、その影は次第に濃くなり、ついには濃い青色となって東の地平線に昇り、東の空を垂直に切り裂く紫色と炎のような筋を背景に力強く浮かび上がった。しかし、富士山がここまで昇るにつれて、その基部は消え、新しいものが山頂にどんどん近づき、大きくなり、円錐はどんどん鈍くなっていき、ついには宇宙のはるか上空の山頂から最後の太陽の光も消え、全体像は消え去った⁽¹³⁾」。

ラインの登山により2つの地図が作成された。1つ目は、ゴータのブルーノ・ハッセンシュタインが編纂した、ラインの登山記を示す火口の地形図である(図2)⁽¹⁴⁾。この地図は、富士山に登頂したことのある在日ドイツ人の間で議論を巻き起こした。オットー・シュットは「その地図では、富士山の北半分を囲む湖沼の位置がまったく間違っている。日本の地図ではこのエリアは正しく示されているのに⁽¹⁵⁾」と述べている。シュットはハッセンシュタインによる地図の訂正として、自らの「山頂のスケッチ」を提示した。その後、地質学者カール・ゴツチェが、山頂で24時間過ごした後、「一部は最近の富士山に関する文献から、一部は私自身が富士山で行った観察に基づいた」うえ、シュットの地図を訂正した⁽¹⁶⁾。ゴツチェの講演会には英国公使のアーネスト・サトウも出席し、自身の富士登山体験を語った。前年、サトウは自身の日本の旅行ガイドにおいて『富士見十三州輿地全図』の有用性について、「古式の優れた旅行地図として『富士見十三州輿地全図』がある。これは主要道路や宿場町を知る上で完全に信頼できる案内であるが、最大の欠点は縮尺どおりに描かれていないことである⁽¹⁷⁾」と称賛している。

ラインの登山によって生まれたもうひとつの地図は、ブルーノ・ハッセンシュタインの『東京湾及び富士山火山周辺』(1879年)である。ラインはゴータのハッセンシュタインに『富士見十三州輿地全図』を送り、助手の三田正⁽¹⁸⁾に翻訳を依頼していた。ハッセンシュタインは原図を丁寧にトレースし、富士山が描かれた部分も含め、文字の円形や登山道の駅番号はそのままに残した。しかし、最終稿では北を上にして読むように文章が統一されたうえ、高度の測定値やその他の詳細が統合されるとともに、山頂と側面の地形の断面図が描かれることで、西洋の慣例にしたがった地図として完成した。(口絵)。日本の原図を西洋の地図作成の枠組みに統合したことは、両者の互換性を示している。原図の空間論理は形式上は保持されながらも、ヨーロッパの方位、測定、科学的表現の規範に従属させたのである。

科学的測定への衝動と同時に起こりながらも最終的には規模においてそれを凌駕したのが、この論文の発端となった発想、つまり山頂からの眺めを楽しむためだけに山に登るという考えである。この観点から見ると、富士山頂は新たな情報を得る場所であるだけでなく、それが属する地域の地図作成を可能にする場

所にもなる。「双眼鏡の助けを借りれば、はるか遠くまで見渡すことができ、海岸線がまるで海図のように目の前に伸びていた⁽¹⁹⁾」。日本国民の間でも並行した動きが進行していた。ハッセンシュタインの地図が発表されたのと同じ年に、東京地学協会が設立された。これは包括的な地図作成と直接的な探検を通じて近代日本の地理についての考え方を再構成する「地理的啓蒙」の始まりであった⁽²⁰⁾。志賀重昂は189年に発表した『日本風景論』の補遺で、「山頂に登り、眼下に見下ろすと、まるで足元に一枚の美しい絵画が広がり、目の前に広がる大地の輪郭が明らかになる。この眺望を得ると、もはや人間界ではなく、天空に引き上げられたような気分になり、宇宙の彼方にある別の惑星から地球を見下ろしているような気分になる⁽²¹⁾」と述べている。同書では前例のないスケールと美的要素を兼ね備えた山頂のパノラマは、近代日本の理想の国民像を育んでいくことに貢献すると主張された⁽²²⁾。

志賀の文章は、山頂のパノラマを近代日本の国民国家構想に取り込んだ好例である。これは二つの実際的な結果をもたらした。一つ目は日本国内における登山の振興で、1905年には日本山岳会が設立された。その決定的なきっかけとなったのはウォルター・ウェストンの著作で、彼は非常によく似た山頂体験を次のように描写している。「富士山は周囲に比べてあまりにも広大で、あまりにも孤立しているため、他のすべては、湖と森、湖と平野のさまざまな色と陰影を持つ、一枚の大きな起伏のある地図にすぎない⁽²³⁾」。もう一つの結果ははるかに広範囲に及んだ。吉田初三郎らによる帝国日本を描いた鳥瞰図では、富士山は肉眼で観測可能な範囲をはるかに超えつつ視覚的な支柱として登場する(図3)⁽²⁴⁾。逆に言うならば、富士山に登ることは帝国の臣民にとって欠かせない体験となり、頂上から望むパノラマは地平線を超えて想像力豊かに広がっていくのである

結論

19世紀、その長い歴史を通じて、富士山の地図描写は、遠景から山頂を中心とした描写へと変化を遂げていった。この過程で、富士見地図は外国人による富士山描写の中心となった。こうした交流は、印刷文化と科学をめぐるネットワークを介し日本と西洋の地図作成の伝統が収斂されていったことを示している。それは日本で行われてきた地図が西洋の技術に直線的に置き換えられたのではなく、取捨選択されたうえ融合されていった事実を確かに示唆している。旅行者のための地図や参詣案内、そして外国人による登山記録は、地図作成をめぐる複雑な環境のなかで公的な測量と共存していたのである。

日本と外国の地図は、富士山の美的評価と同じく1890年代まで並行した歴史を展開してきたが、その頃を画期として富士山は、帝国日本における最も顕著な空間的支点として、その山頂によって定義されるという新たな視覚に収束しはじめた。

以上のように地図史における富士山の変容——信仰世界の象徴から科学的、

そして帝国のランドマークへ——は、空間をめぐる想像力が近代日本においてより広範に再編成されていく過程の一部でもある。地図作成をめぐる世界的な流れのなかで変容していく富士山の位置づけは、異文化間の知識の伝達、空間としての山岳が内包する物質性と政治性、そして地理という知の創出過程で象徴的な意味と実証的な測量が相互作用を及ぼした重要な例といえよう。

註

(1)安川茂雄『近代日本登山史』（四季書館、1969年、21頁）。松島仁・庄司美樹編『谷文晁×富士山— 山を写した時代の寵児』（静岡県富士山世界遺産センター、2019年）。

(2)原文は下記のとおり。

「其絶頂の真景五尺四方の紙に細密に写し里程又詳なり。此図絶頂にて写し浅間神社に訂旺せり。（中略）余借覧の際、方今、世間に富士絶頂の図と称する物に比較するに大雅優れり」。

谷雄幸『江戸時代の山岳紀行— 三山（富士山・白山・立山）紀行を中心に—（第2部）』（『山梨英和短期大学紀要』30、1996年、115-128頁、参照）。

(3) Smith, Henry. "World without Walls: Kuwagata Keisei's Panoramic Vision of Japan." In: Gail Lee Bernstein and Haruhiro Fukui (eds) *Japan and the World* (London: MacMillan, 1988), pp.3 - 19.

(4)1838年版については、富士吉田市歴史民俗博物館編『おめでたいカタチ—富士の意匠』（富士吉田市教委員会、2005年）図版37、歌川貞秀による1848年版については、Miyazaki Fumiko "An Artist's Rendering of the Divine Mount Fuji." In: Kären Wigen, Sugimoto Fumiko and Cary Karacas (eds) *Cartographic Japan: A History in Maps* (Chicago: Chicago University Press, 2016), pp.98 - 101,を参照のこと。

(5)以下、「富士見地図」と略称。富士市立博物館編『鳥の目で見た富士: 鳥瞰図の世界』（富士市立博物館、2012年、3-6頁）。

(6)前掲註1 安川茂雄氏著書。

(7)Alcock, Rutherford. Narrative of a Journey in the Interior of Japan, Ascent of Fusiyama, and Visit to the Hot Sulphur - Baths of Atami, in 1860. *The Journal of the Royal Geographical Society of London* 31

(1861), p.344. Also in Alcock, Rutherford. *The Capital of the Tycoon* (New York: Harper & Brothers, 1863), p.370.

(8)Alcock 1861, p. 332.

(9)Miyazaki Fumiko. "Female Pilgrims and Mt. Fuji: Changing Perspectives on the Exclusion of Women." *Monumenta Nipponica* 60 - 3 (2005), pp.339 - 391. 谷有二『黒船富士山に登る! 幕末外交異聞』（同朋舎、2001年、169-179頁）。

(10)Knipping, Erwin. Gleichzeitige Barometer - Beobachtungen angestellt auf dem Gipfel und am Fusse des Fujiyama, vom 27ten Juli bis 10ten August, 1873

Mittheilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und

Völkerkunde Ostasiens. Bd. 1, Heft 3, 1873, p.8.

(11) Rein, Johannes Justus. “Der Fuji - no - yama und seine Besteigung.”

Petermann's Geographische

Mittheilungen 25 (1879) , p.365.

(12) Rein 1879, p.368.

(13) Nauheim, Tobit, Shigekazu Kusune and Winfried Schenk (eds) Japan 1873 - 1875 *Die Tagebücher des Bonner Geographieprofessors Johannes Justus Rein*, Band 1 (Bergisch Gladbach: E. Ferger Gladbach, 2020) , p.195.

(14) Nauheim, Tobit. “From Fieldwork in Japan to Print: The Reciprocal Relationship between Johannes Justus Rein and the Perthes Publishing House”. *Mapping Africa and Asia*, 2025.

Available from <https://karafas.hypotheses.org/8278>

(15) Schütt, Otto. “Zur topographischen Skizze des Vulkan's Fuji und seiner Umgebung.” *Mittheilungen*

der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens Bd. 3, Heft 27 (1882) , p.277.

(16) Gottsche, C. “Bemerkungen zu Herrn Schütt's topographischer Skizze des Fuji.” *Mittheilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* Bd. 3, Heft 28 (1883) , pp.363- 365.

(17) Satow, Ernest. *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*. Yokohama: Kelly & Walsh, 1881, p.xiv.

(18) Müller, Patrick. “Mapping Japan: Bruno Hassenstein's Map of the “Surroundings of Tokyo Bay and of the Volcano Fuji - No - Yama” (1879) ”. *Mapping Africa and Asia*, 2024.

Available from <https://karafas.hypotheses.org/6357>

(19) Warren Clark, *Life and Adventure in Japan*, New York: American Tract Society, 1878, pp.114 - 15.

(20) Wigen, Kären. “Discovering the Japanese Alps: Meiji Mountaineering and the Quest for Geographical Enlightenment.” *Journal of Japanese Studies* 31 - 1 (2005) , p.25.

(21) Wigen 2005, 13. 原文は下記のとおり。「〔山〕の最絶頂に登りて下瞰せば、雲煙脚底に起り、その下より平面世界の形勢は君に向ひて 長揖し来り、悉くこれを掌上に弄し得、君是に到りて人間の物にあらず、宛然天上にあるが如く、若しくは地球以外の惑星よりこの惑星を眺観するに似。」

(22) 志賀重昂『地理学』（『志賀重昂全集』第四巻、東京・志賀重昂全集刊行会、1928年、270頁。

(23) Weston, Walter. “Fujiyama in May”. *The Alpine Journal* 118, Nov 1892, vol.XVI (London: Longmans, Green, and Co., 1893) , p.249.

ウェストンの日本登山への影響については、安川1969年、223 - 228 頁を参照。

(24) 前掲註5 富士市立博物館図録、 3 - 6 頁。